

キャンパス通信 ippeki



01 特集／ 熊本地震発生

—赤十字の看護学生として
私たちにできること—

- 03 新たな学修支援施設
「ラーニング・commons」がオープン
知的書評合戦 ビブリオバトル(第1回学内予選会)を
開催しました
- 04 新学長に田村やよひ氏が就任
- 05 そうだ! 保健師になろう!!
- 07 キャンパス日記
- 08 海外研修報告
- 09 看護部長からのメッセージ／研究室訪問
- 10 平成29年度 入学試験案内／平成27年度 概況報告

ラーニング・commonsで自主学修する学生たち

4月に新たな学修支援施設「ラーニング・commons」がオープンしました。(詳細 P.3)

第11号
2016.4 ▶ 2016.9



ひとりを看る目、その目を世界へ



日本赤十字九州国際看護大学

Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

熊本地震発生

— 赤十字の看護学生として

私たちにできること —

平成28年4月14日と16日に熊本県で発生した地震は、
家屋倒壊や土砂災害等の甚大な被害をもたらしました。
被災地では、未だ、住宅や生活インフラの再建が課題といわれています。
発災から約半年——。

この間の、赤十字看護大学としての本学の取り組みを特集します。



「学生復興支援委員会」発足とボランティア活動

4月14日の地震直後から「私たちも赤十字の看護学生として何かできることをしたい」という声が生徒たちから挙がり、熊本県出身の学生を中心に4年生の十数名が、日本赤十字社近衛忠輝社長の「人道の敵は無関心である」という言葉を思い起こして、「他人に起きていることに関心を持ち、自分にできることは何かを常に考えることが大切である」という思いを共有するため、フリーディスカッションの開催を提案しました。翌15日には学部生約50名が集まり、中長期的な視点に立った支援をめざした「学生復興支援委員会」を自主的に発足させました。

4月16日には、大学近隣の2カ所のスーパーで募金活動を行い、その後も継続的に活動が続けた結果、2か月後には100万円を超す義援金が集まりました。

地震発生から一カ月後、益城町のボランティアセンターを通して支援活動を行うことが可能になり、週末に被災地に向いて、瓦礫の撤去作業や避難所の清掃活動を行いました。避難所に避難されている方々は、一畳ほどの空間で日々を送ることを余儀なくされており、精神的にも肉体的にもストレスを抱えているのではないかと感じて、仮設トイレや体育館の2階部分、教室など「以前よりもきれいに」をモットーに心を込めて清掃活動に取り組みました。

6月には学内報告会を開き



総括をしました。今後も、少しでも復興に向けた支援につながるよう活動を継続していきます。

※これらの活動は、中村美沙希さん(学部3年生)と実崎歩美さん(学部2年生)が共同執筆し、日本看護協会出版会発行の雑誌『看護』8月号に「特別寄稿」として掲載されました。

公開講座で市民と一緒に考える

7月の公開講座では、「災害時にまもる『いのち』と『健康』」をテーマに地域の方々と共に考える機会をもちました。「避難生活中に起こりやすいこと」と題し、本学の乗越千枝教授が、自然災害の疾病構造と災害関連死に関する知識や、ストレスや感染症など災害時や避難生活において起こりやすいことと予防策について紹介しました。続いて、小池伸享講師が、全国に500個班編成されている日本赤十字社の災害救護活動の実際について紹介しました。当日は、多くの方に参加いただき、「これからいつ災害に巻き込まれるか分からないのでこういった避難生活は医療関係者だけでなく知る必要があると思う。また、赤十字の活動を詳しく知れてよかった。」といった感想をいただきました。

日赤6大学交流会での被災地視察

例年8月に開催している日赤6大学交流会では、「熊本地震における災害救護と防災」をテーマに、全国の日本赤十字学園の看護大学の学生約50名が集まり、交流を深めました。初日は、熊本赤十字病院の東看護部長等から地震後の活動について話しを伺い、発災時に迅速に対応するためには日頃の教育と訓練が重要だということを学びました。その後、被害が大きかった益城町と御船町を視察し、「4か月前にテレビで見た景色と変わらない現状を目の当たりにして衝撃を受けた」という学生もいました。2日目には、今回の地震で現地の医療支援活動に従事した本学の清末定美講師の講話の後、グループディスカッションを行いました。交流会に参加した学生は、同じ看護の道を目指す仲間との出会いを通じて、また復興を願う気持ちを共有して、今後も日赤の看護学生として積極的に活動しようという決意を新たにしようでした。



宗像市総合防災訓練に参加

9月には、本学と宗像市が締結している災害時における支援協力協定に基づき、宗像市総合防災訓練に学生と教員が参加しました。市内で大規模地震が発生したという想定の下、指定避難場所である赤間小学校内に設置された救護エリアで、避難者の誘導、車椅子等による避難介助、負傷者への応急処置訓練を行いました。訓練に参加した谷口美紀さん(学部4年生)は、「訓練を通じて、災害時に避難すべき場所や近所にどのような人が住んでいるのかなどを知り、地域の中で自分の役割などを改めて考えた。地域コミュニティの『自助・共助』という力が強化される訓練は、非常に重要だと実感した。」と感想を述べていました。

国際フォーラムで教職員も改めて勉強

学生の夏季休業期間中、国際フォーラムにおいて「LocalからGlobalへ 大規模災害その時本学は！ー東日本大震災 熊本地震の経験から考えるー」をテーマに教職員が改めて勉強する機会を持ちました。清末講師からの救援活動の実際についての話題提供に続き、平成23年3月11日の東日本大震災の際、被災者支援と同時進行的に大学機能を継続させた石巻専修大学の尾形孝輔氏から「災害時における大学の役割と社会貢献ー東日本大震災の経験からー」と題し、講演いただきました。尾形氏からは、震災直後から、学生の安否確認、被災学生の学内宿泊による安全確保、それと同時に、地域の被災者や関係機関から次々と寄せられる要請に対応し、避難所としての施設提供、自衛隊や自治体、ボランティア団体等の受け入れと環境管理など、同時多発的に発生する課題に果敢に取り組まれた状況が紹介されました。本学も災害時に、被災者を支援しながら大学機能を継続していくためにはどうすればよいか意見交換を行い、早急に備えるべき点や改善点について、具体化に向けた示唆を得ることができました。

※11月6日(日)には、災害時要支援者への対応についてのシンポジウムを本学で開催します。お問い合わせの上、ご参加下さい。



新たな学修支援施設 ラーニング・コモンズ がオープン



4月から、実習棟2階の演習室の一部が、ラーニング・コモンズとして生まれ変わりました。ラーニング・コモンズとは、共同で学習するための新しい空間です。情報資源の活用のお場としてだけでなく、学生同士が互いに助け合い、議論を進め、学びを深めるスペースです。仲間と話し合いながら学ぶことで、新しいアイデアが浮かんだり、みんなの学ぶ姿勢に刺激を受けたり、また、そこで話したことをきっかけに新しい人間関係が生まれるなど出会いのお場でもあります。

落成式に参加した田原恵さん(学部3年生:前学生自治会長)は、「新施設ラーニング・コモンズの開放的な空間を初めて目にした瞬間は驚きでいっぱい、言葉も出ない状況でした。また、細やかな配慮も多くあり、非常に便利のよい施設だと感じました。勉強が出来るスペースというだけでなく、学生同士の交流のお場として利用できる施設であり、授業でもグループディスカッションやプレゼンテーション等を行える施設ということで、大いに活用し、勉学に励み、感受性を高めていきたいと思っています。」と話していました。

学生のおみなさん、これから実習のまとめやプレゼンテーションの練習など、グループでのアクティブ・ラーニングのお場として、ぜひ活用してください！

知的書評合戦 ビブリオバトル(第1回学内予選会)を開催しました

7月11日にラーニング・コモンズで、「ビブリオバトル」を開催しました。ビブリオバトルとは、出場者がおすすめの本を持ち寄り、5分間でその魅力を語って、最後に参加者全員で読みたくなった本(チャンプ本)を投票して決定する書評バトルです。大学生参加の大会が、毎年1回、全国規模で行われています。

今回の会は、「ビブリオバトル九州北部地区決戦大会」(11月頃開催予定)に出場する本学の代表者を決定するものです。発表者は、1年生の荒木美智子さん、岡村里美さん、笠井麻結さん、2年生の有浦旭香さん、堀翔吾さんの計5名です。

今回5人が紹介してくれたのは全て小説でしたが、発表者は、「本を読むのが好きではなかったが、この本を通して自分の強みを知ることができ、読書の良さを教えてもらった」、「医療者である主人公の言動が看護師を目指す自分の励みになった」、「人間関係で悩んでいた時に頭の中をすっきりさせてくれた」など、それぞれの思いを込めて、本の魅力を語ってくれました。

発表後、投票により、1年生の岡村さんが紹介したR・J・パラシオ著『Wonder』が見事チャンプ本に選ばれました。

最後に、吉永図書館運営委員長から発表者に対する講評とアドバイスをいただきました。

次回のビブリオバトルは、後期のはじめに開催の予定です。多数の皆様のご観覧をお待ちしています。(記:図書館運営委員会)

■出場者のお勧め

1. さだまさし著『風に立つライオン』幻冬舎、2014
2. 有川浩著『海の底』角川書店、2005.
3. R・J・パラシオ著『Wonder』ほるぷ出版、2015.
4. ガース・ニクス著『王国の鍵1:アーサーの月曜日』主婦の友社、2009.
5. 有川浩著『ヒア・カムズ・ザ・サン』新潮社、2011.



新学長に 田村やよひ氏が就任

平成28年4月から学長を務めております田村 やよひです。

団塊の世代の一人、小柄な部類に入る女性です。出身は静岡県で、高等学校まで過ごしました。

看護教育を東京大学医学部附属看護学校と神奈川県立公衆衛生看護学院(いずれも現在はありません)で受け、看護師と保健師の免許を持っております。

一般教育としては、法政大学社会学部応用経済学科を卒業しました。40歳を機に学び直しをしたいと考え、聖路加看護大学(現在の聖路加国際大学)と東京大学で大学院を修了しました。看護の業務に初めて携わったのは20代後半でした。筑波大学附属病院開設準備室、外来、セルフケア病棟、小児病棟を合わせて3年経験をしました。その後の9年間は、筑波大学医療技術短大で成人看護学、老年看護学の教育に携わりました。



大学院で学んだ後は、厚生省(現在の厚生労働省)で看護行政に携わりました。看護行政とは、簡単に言えば日本全体の看護の質と量を、社会の変化やニーズを踏まえて整えていく仕事です。

13年の間には、看護師不足に対応するための看護職員の需給見通しの策定、在宅看護や精神看護学を強化するための看護教育カリキュラムの改正、性別によって異なっていた資格の名称を統一した保健師助産師看護師法の改正、新人看護師・助産師の臨床能力向上を図るための卒後研修の仕組みの検討など、看護の専門性を高めようと新しいことにチャレンジする日々でした。これらに加えて、毎年、保健師助産師看護師国家試験委員会を組織し、問題作成を支援し、国家試験を実施しました。

平成18年からは、厚生労働省が設置した看護学の高等教育機関である国立看護大学校で大学校長の職を10年間務めました。この間には、大学院に相当する研究課程部に博士課程を設置し、実習病院の看護部と共同研究を進めるための臨床看護研究推進センターを開設しました。

厚労省で働くようになって以来、開発途上国への国際協力にも関わりました。国際協力機構(JICA)の技術協力プロジェクトが展開されたスリランカ、エルサルバドル、ウズベキスタン、ラオス、カンボジア、インドネシアの国々で短期の専門家として、また調査団のメンバーなどとして、看護教育の強化や看護規則の策定などを支援してきました。

学会活動では、昨年までの2年間、公益社団法人日本看護科学学会の理事長を務めました。今年からは一般社団法人日本看護学教育学会の監事の役を担うことになりました。

海が北にあることが感覚的にまだしっくりこない日々ですが、たくさんのツバメが子育てをする宗像の街、緑豊かな大学周辺はとても気に入っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

せつだ! 保健師になろう!!



本学では大学4年間で、看護師免許のほかに保健師免許取得に向けた
国家試験受験資格の取得を目指す「保健師課程」を専攻することができます。
保健師課程の履修を希望する学生は、3年前期に実施する選考試験に合格する必要があります。
選考試験の詳細は、3年次オリエンテーションにて説明します。

保健師課程紹介

保健師課程ではコミュニティにおけるヘルスプロモーション活動に必要な知識や技術を学びますが、その学習において公衆衛生看護学実習を履修する必要があります。今回は、今年度の実習のようすをご紹介します。

7月の実習では宗像市の赤間西地区コミュニティの土穴福祉会福祉員による「高齢者の見守り活動」に参加させていただきました。土穴福祉会では平成19年よりこの活動を始められ、現在99名の一人暮らしのご高齢の方を対象に訪問活動を実施されています。今回、学生はこの訪問活動に同行しご自宅にお邪魔して血圧測定をしたりお話を伺わせていただいたりしました。地域の皆様の温かいご指導とご協力のもと、学生はコミュニティでの住民組織活動を学び、地域包括ケアシステム構築においても云われている「住み慣れた地域で最後まで自分らしく生活する」ための必要な自助・互助・共助・公助についても考察することができました。

この模様は、宗像市の取材を受け宗像市広報誌むなかたタウンプレス平成28年8月15日号に掲載されました。

8月の実習では、5週間、福岡県内の保健所、市町村等の行政機関での実習を行いました。この実習では地域のご協力のもと行政保健の現場で保健師等の指導を受けながら地域アセスメント、健診や保健指導、家庭訪問、健康教育などを実践し自主的に学習します。今年度は実習最終週の9月21日に実習指導者を大学に招き学習成果発表会を開催しました。学習の集大成として学生自らが明確化した地域の健康課題に対して策定した事業計画をプレゼンテーションしましたが、発表する学生の姿に大きな成長を見ることができました。



熱中症予防についての説明



福祉会で活動概要を聞く様子



なつたきっかけは、市町村保健センター実習でした。就職活動前は、卒業後すぐに保健師として働くのか、看護師経験を積んで保健師になるのか迷いました。少
、卒業後は看護師として勤務することに決めました。いずれ地域で働くことを踏まえ、地域医療を目標に掲げてある病院を選び、看護を学びました。看護師4年目
ってくれたのが、大学の卒論指導を担当いただいた先生でした。小論や面接対策の指導を受けたいとお願いすると、快諾してくれました。それからは、休みや夜勤
今ではやりがいを感じながら仕事しています。大学で得たものは、時間が経過する程、大きかったと実感しています。社会人になると、ゆとり時間を確保すること

保健師はこんな仕事

保健師は、保健師助産師看護師法総則第二条において、「厚生労働大臣の免許を受けて、保健師の名称を用いて、保健指導に従事することを業とする者」とされる国家資格です。

私たちの社会は時代とともに移り変わります。現代では少子高齢化、国際化、情報化が進み、人びとが抱える健康問題も多様で複雑に変化しています。一例を挙げれば、生活習慣病、児童虐待、高齢者や障がい者の孤立、自殺対策を含むあらゆる年代のメンタルヘルス、新型インフルエンザ等の新興感染症、自然災害、健康格差などですが、保健師とは、これらの問題を解決するため、当事者である個人や家族を支援すると同時に、問題の原因や広がり、深刻さを見極めながら、地域社会全体に働きかけて支援するための知識や技術を有する公衆衛生（地域保健）の専門家です。

保健師の仕事は、人びとが抱える健康問題の背景にある社会の問題をも察知し、原因を探索して根本的な解決を図っていく、いわば「社会を看護する仕事」ともいえるでしょう。社会の基盤となる健康な地域をその地域住民と共に創っていく「地域づくり」を念頭に置きつつ、地域住民自らが主体的に行動し、地域住民自身や地域全体の健康状態を改善できるように支援する仕事や、地域に顕在している健康課題や潜在している健康課題を把握し、課題解決のための計画を立案し、実施、評価する仕事、さらには地域の健康課題の解決に必要な社会資源を開発する仕事などが含まれます。

保健師の仕事は、地域で生活する乳幼児から高齢者、健康な人から病気や障がいを抱える人等、あらゆる人びとと地域全体の健康のため、対象や地域に応じた方法で展開されます。具体的には、対象となる個人や家族への家庭訪問や健康相談、集団への健診・検診や健康教育、地区組織の育成等が挙げられますが、これらの活動は保健師自身が地域に出向き、地域に根ざして展開される活動（地区活動）です。保健師はそのような活動をととして豊かなソーシャルキャピタル（住民や組織同士がつながり、地域に根ざした信頼やネットワークなどの社会関係）の醸成を図ることに役割を担っています。

保健師の活躍の場

保健師の活動は、都道府県・市町村等の保健所・保健センター等で保健行政に従事する行政保健師、企業の産業保健スタッフとして勤務する産業保健師、学校等で学生と教職員の心身の健康保持に努める学校保健等広がりがあります。

全国保健師教育機関協議会HPから抜粋 <http://www.zenhokyo.jp/index.html>



学習成果発表会



地域の方の血圧測定



保健師として活躍する先輩

原口 真麻さん 春日市 福祉支援部 子育て支援課 母子保健担当 保健師
(2010年度 看護学部卒業)

私は今、5年間の看護師経験を経て、夢であった保健師として市町村で勤務しています。保健師が私の目標としは自信を持った状態で保健師として働きたいと思い、看護師として病態や患者さんへの対応を学ぶことを目標にの時から、市町村保健師採用試験にトライ開始し、翌年に一次試験を通過できました。そこで、心強い味方になり、明けの時間を利用して大学を訪ねると、第2,3次試験まで面倒を見てくれました。おかげで採用までこぎ着けが難しくなります。今のうちに色々なことに興味を持ち、実践し、自分の可能性を広げてみてください。



6月2日 地域包括ケアシステムを学んでいます

学部4年生は5月23日～6月10日の期間に専門性強化実習を行っています。この実習は、学生自らが看護実習の企画、実施から評価までを行い、看護を探究し創造する力を養う目的で実施するものです。4年生全員がそれぞれの領域に分かれて実習していますが、ヘルスプロモーション・在宅看護領域が担当する学生は、病院、訪問看護ステーション、長崎県上五島のホームホスピス、宗像市内の小学校、地域などの様々な場所で実習を行っています。その中で、宗像市日の里コミュニティで地域包括ケアシステムを学ぶ5名の実習の様子が新聞に掲載されました。

現在、誰もが住み慣れた地域で最後まで安心して安全に暮らせることを目的とした地域包括ケアシステムの実現は社会的な重要課題です。このシステム構築の実現に向けて、看護職は生活者の視点を持ち健康の専門職としての役割があると考えます。日の里コミュニティの皆様の多大なるご協力のもと、学生は地域包括ケアについて積極的に学習し、今後その成果をコミュニティへ還元できるよう学んだ内容の分析統合に頑張っています。

(記:教授 乗越千枝)



2016(H28)年5月29日 西日本新聞 28面

7月11日 上田奨学会献花式・奨学金貸与式を行いました

上田米蔵翁は、1958(昭和33)年、本学の前身である福岡赤十字高等看護学院(後の福岡赤十字看護専門学校)の創設時に多額のご芳志をご寄贈くださいました。その後1968(昭和43)年に上田奨学会を設立され、福岡の赤十字看護師養成にご尽力いただきました。

これに謝意を表し、日本赤十字社福岡県支部に上田米蔵翁銅像が置かれました。2009(平成21)年からは本学正面玄関のロータリー横に移転され、今も若き看護師たちの未来を見守ってくださっています。

この上田米蔵翁のご偉功に敬意を表すべく、本学では毎年銅像前にて献花を行っています。今年は7月8日に献花式を行い、米蔵翁のご令孫である上田奨学会上田康蔵理事長と同会常任理事を務める学長の田村やよびが献花しました。

献花式の後には上田奨学金貸与式を行いました。これは、上田奨学会より本学大学院1年次に在学する者に対し貸与されるもので、建学の精神である人道に基づく看護を実践し得る専門家の育成を目的としています。経済的理由により修学が困難であっても、将来、看護分野において、社会に貢献する積極的な意思があれば、奨学金を借り受けることができます。

今年は、上田康蔵理事長より本学大学院生2名に奨学金が貸与され、激励の言葉をいただきました。大学院生からは、お礼の言葉と研究に向けての抱負が述べられました。

(記:学生課)



8月23日 地域の小学生向け体験イベント

「夏の課外授業 in むなかた ～Tシャツに体の中を描いてみよう～」を実施しました

毎年、宗像市が夏休み期間中に、親子で多彩な体験活動が楽しめるように実施している事業「夏の課外授業inむなかた」の一貫として、本学は、2014年から宗像市、宗像市近郊(古賀市、直方市など)に在住する小学生の親子を対象に「Tシャツに体の中を描いてみよう」体験活動を開催しています。

8月23日、本学教員6名の指導の下で、第3回目の「Tシャツに体の中を描いてみよう」に、小学生の親子13組(計39名)が参加し、身体の構造をビデオでみたり、聴診器で心音を聞いたりして、体のしくみを学びながら、白いTシャツに体の臓器を描く体験をしました。

授業終了後も人体模型を見たり触ったり、夏休みの有意義な時間となったようで、「昨年度に引き続き参加しました!」「楽しく学べました!」「将来お医者さんになりたい」との感想を寄せていただきました。

今年もそれぞれ作成した臓器Tシャツにひらがなや漢字で臓器の名前を書き込んだり、着用したまま帰宅したりしていました。この授業をきっかけに家族で「体」や「健康」について考える時間となりましたら幸いです。

今年も多くの皆様に参加していただきありがとうございました。

(記:地域連携室)



私たちは、8月2日から9日にかけて、国際保健・看護Ⅱの海外研修として、ベトナム社会主義共和国を訪れました。今年は「災害から命と健康を守る」というテーマのもと、特に「自助能力の向上」に焦点を当て、研修を行いました。研修では、ナムディン看護大学、ナムディン総合病院、ナンヴァン村ヘルスセンター、ベトナム赤十字社、ドンアン診療所の施設を訪問しました。

ナムディン看護大学では、学生と合同ディスカッション、救急法の演習、ナムディン総合病院の実習に向けた日常生活援助方法の合同演習、交流会を行いました。合同ディスカッションは、「コミュニティが自助を高めるために災害静穏期に準備しておくことは何か」というテーマで、日越混合グループでコミュニティが取り組む必要のあるものを三つ挙げ発表するというグループワークを行いました。それぞれのグループからは、良い健康状態(Good Health)、避難訓練(Training)、素早い決断と判断(Making decision and Judge)、非常食、水等の資源(Resources)、救急法等の技術(Skill)等という意見が出ました。ディスカッションは、日本語、ベトナム語、英語、そしてボディランゲージを駆使し、言語の異なる人とコミュニケーションを図ることの難しさを改めて感じました。しかし同時に、相手の意見を尊重し合いながら話し合い、まとめ、発表するプロセスの楽しさを感じることもできました。続いて、応急処置についての演習を行いました。この演習では、「知っておくと便利な応急処置、特に災害時に多い外傷の応急処置」という課題を提示され、各グループで考え練習し、それを披露しました。救急法はナムディン看護大学の学生も学習しており、お互いに教え合いました。他の人に教えることで自分たちの知識の再確認ができました。交流会では、椅子取りゲームをしたり、旧暦の七夕にちなみ笹の葉に願い事を書いた飾りつけをしたりと楽しい時間を過ごしました。

ナムディン総合病院では、院内の見学および実習を行いました。ナムディン総合病院は、21の診療科をもち、病床数747床、医師138名、看護師189名が勤務する病院です。ナムディン省の中で一番大きな病院であり、地域住民の健康を守る最後の砦としての役割があります。そのため、患者の受け入れを断ることができず、ベッド数は650床と政府に報告されていますが、実際は747床稼働しており、1ベッドを複数の患者で共有することもあります。院長からは、病院に国家予算があてられない状態で、病院は院内環境や教育面を充実させることが困難という問題に直面しているという話を聞きました。病院内の見学・実習を通して、スタンダードプリコーション(米国疾病管理予防センター(CDC)が推奨している病院感染対策の基本的な方法)や衛生環境が整っていない状態にあるという印象を受けましたが、ベトナム医療の置かれている現状を知ったことで、限られた資源の中で努力しながら地域住民に医療を提供していることが分かりました。また、今まで日本の医療を基準としてベトナム医療を捉えていましたが、日本が基準ではないということに気づかされました。

ナンヴァン村ヘルスセンターでは、健康教育を実施しました。ナンヴァン村ヘルスセンターは、コミyun(自治体)レベルの第一次医療施設で、医師の補助3名、看護師1名、助産師、薬剤師の職員と、11名のヘルスボランティアスタッフで運営されていました。ナンヴァン村ヘルスセンターは、地域住民のために、診療活動や予防接種の実施、分娩助産、伝統医療の提供を行っています。伝統医療では、漢方薬による治療が実施されており、敷地内にはアレルギーや咳、下痢等に効果のある薬草が多く栽培されていました。ヘルスセンターでの研修2日目には、本研修のサブテーマでもある自助能力を高めるための健康教育を実施しました。健康教育を企画した理由は、昨年度の実習から、この地域の住民の多くは農業を営んでおり、肩こり、腰痛を訴える住民が多いという報告があり「今の私たちができること」を考えたとき、人体の構造と機能や疾病と治療、公衆衛生学、教育的アプローチを学んだ私たちなら、健康教室を実施できるのではないかと考えたからです。薬による疼痛緩和だけでなく、肩こりや腰痛の緩和に加え健康の保持・増進につなげるためにも、簡単な体操を紹介してはどうかと考え実施しました。

ベトナム赤十字社では、現在取り組んでいる事業内容を聞きました。特に地域での健康づくりに力を入れており、コミュニティで災害に対応するチームが存在することを学びました。

その日の午後は、ベトナム赤十字社の傘下にあるドンアン診療所を訪問しました。ドンアン診療所は、ナンヴァン村ヘルスセンターと同様にコミyunレベルの第一次医療施設で、貧しい人のために設立され、医療費を払うことが困難な人には無料で診断や治療などの医療を提供していました。

今回の研修を通して、ベトナムの社会背景、生活様式、医療の現状を目の当たりにし、日本を基準としてベトナムを捉えることはできないということを知り、今までの自分たちのものの見方や考え方を見直す機会となりました。また、ナムディン看護学生との交流の中で、ナムディン看護学生の学ぶ姿勢をみて、私たちも積極的に学ぶ姿勢を身につけることができました。ここでの学びは、これからの学習への良い刺激となり、今後控えている実習等に生かしていきたいと思えます。



看護部長 からの メッセージ

M E S S A G E

わたしたちと一緒に
赤十字の未来をつくりましょう

佐賀

SAGA

唐津赤十字病院

看護部長 下本 和子



唐津赤十字病院は、平成28年8月1日に新築移転し、新たな飛躍の第一歩を踏み出すことになりました。新病院は、国・県・唐津市・玄海町の全面的な協力をいただき、屋上から唐津城や虹ノ松原が見渡せる素晴らしい自然環境の中に建設されました。今後はより一層地域との連携をとりつつ、救急・小児・周産期医療の充実を図ると共に、地域医療の要としての役割を果たすべく職員が一人丸となって「安心な医療」「あたたかい看護」「地域への貢献」を展開してまいります。

新病院では、屋上にヘリポートが新設されました。救急患者の搬送が短時間で出来るようになり、さらに救命救急センター・手術室・分娩室と直結させることで、すぐに治療を始めることが出来ます。8月以降ヘリコプターで搬入された患者は5人になり、佐賀県北部地域の医療の「最後の砦」としての役割を果たすことが出来るようになりました。

看護部では、「患者様の尊厳を守り、相手の立場に立った思いやりのある看護をめざします」を理念に掲げ、看護の質の向上、患者サービスの向上に努めています。新病院では全ての病室への動線を短くするために、スタッフステーションはひし形のデザインになっております。また全面電子カルテになり戸惑いもありましたが、PNSのパートナーと補完しながら頑張っています。従来から実施している新人看護師対象の3ヶ月間のローテーション研修は8年を経過しましたが、これからも継続し個々の状況に合わせた柔軟な指導を心がけ、スムーズに職場適応できるように全看護スタッフで支援しています。赤十字教育施設の卒業生も年々増え心強く思っています。新しい病院で皆様と一緒に仕事出来ることを期待しております。

8月1日、病院移転に際しボランティアで協力して下さいました皆様有難うございました。

※PNS(パートナーシップ・ナースィング・システム) 看護師2名が共働で看護業務にあたる看護方式



研究室 訪問

4月より成育看護学と大学院の助産学を担当しています永松美雪です。

私は、学生の頃に母性看護学実習で、育児に戸惑う若い女性に接し、母子を支える助産師を目指したいと思いました。その後、久留米大学附属病院に就職し、幸せなカップルに限らず、望まない妊娠による人工妊娠中絶や子どもを育てることができない10代のシングルマザーなど、出産・育児に困難を抱えている多くの女性に出会い、その予防や支援をしたいという思いを持ち続けています。その経験は、私の研究や活動の基礎となり、親子関係や男女関係に注目した研究や支援を行っています。研究結果をもとに、思春期・青年期の男女と保護者へ、若い男女がお互いを尊重する関係をつくるグループ学習や性暴力を受けた女性への支援に取り組んできました。昨年より、インターネットによる個人学習を取り入れ、仲間や男女間の暴力を予防する教育と対応のプログラムを開始しています。

看護師や助産師を目指す皆さんが、性と生殖の健康・権利を守り、支援を実践できる判断力・技術力をもち、チームで連携して発揮できることを目指しています。また、グローバルな視点で子どもと女性、そのパートナー・家族の健康について関心を持って学ぶことを期待します。関心がある方や相談したいことがある方は、是非、研究室においてください。

成育看護領域 教授
永松 美雪 先生



平成29年度 入学試験案内

	入試区分	出願期間	試験日
大学院	一般選抜・社会人選抜・社会人推薦入試(後期)	平成28年12月21日(水)～平成29年1月6日(金)	平成29年1月28日(土)
学部	一般入試	平成29年1月4日(水)～1月20日(金)	平成29年2月4日(土)
	大学入試センター試験利用入試	平成29年1月4日(水)～1月20日(金)	面接試験日:平成29年2月4日(土)

あなたも挑戦してみませんか! 大学院は、看護をもっと深めたい方をお待ちしています。

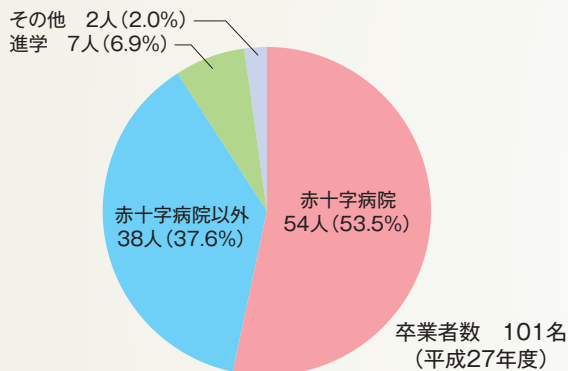
本学の助産教育領域に進学することを決意した理由は、看護師としての臨床体験の中で生命に対し深く学びたいという思いが強くなってきたからです。進学するにあたり、幼い2人の子どものことが不安ではありましたが、時間を工夫し、有効に使うことを心掛け、学びを進めていくことができました。また、学費の面でも、国際ソロプチミスト福岡による助産師を志す院生のための助成金を受けることで、大学院での学びが充実したものになりました。大学院では、単に知識を与えられるのではなく、どのように学び、深め広めるのか、その方法を習得することができました。現在、修士の学位と助産師国家資格を取得し、クリニックにて勤務しています。大学院での学びを来院者と共有できる喜びを感じながら、更に知識を深め実践していこうと考えています。

医療法人養真堂 産婦人科 筑紫クリニック助産師 **福田 陽子さん**
(2013年度修了)



平成27年度 概況報告

平成27年度 看護学部進路状況



平成27年度 国家試験合格実績

試験区分	合格率	合格者数	受験者数
看護師国家試験	97.0%	98	101
保健師国家試験	89.3%	25	28
助産師国家試験	100%	4	4



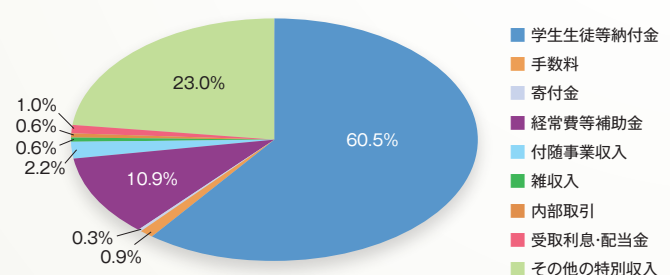
決算報告 (事業活動収支計算書構成比率)

▶事業活動収入の部

(単位:円)

区 分	科 目	決算額	構成比
教育活動収入	学生生徒等納付金	701,850,000	60.5%
	手数料	10,110,310	0.9%
	寄付金	3,313,638	0.3%
	経常費等補助金	126,167,340	10.9%
	付随事業収入	25,679,325	2.2%
	雑収入	7,493,846	0.6%
	内部取引	6,413,273	0.6%
教育活動外収入	受取利息・配当金	11,281,834	1.0%
特別収入	その他の特別収入	267,266,426	23.0%
事業活動収入計		1,159,575,992	

事業活動収入構成比率

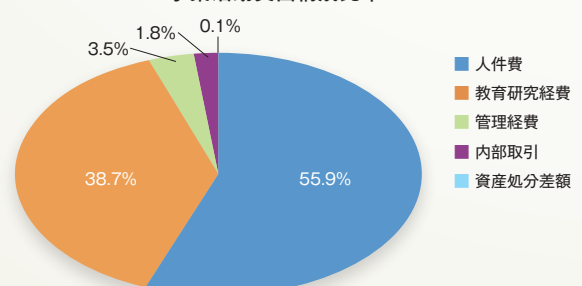


▶事業活動支出の部

(単位:円)

区 分	科 目	決算額	構成比
教育活動支出	人件費	550,808,986	55.9%
	教育研究経費	381,838,986	38.7%
	管理経費	34,918,412	3.5%
	内部取引	18,075,899	1.8%
特別支出	資産処分差額	167,427	0.1%
事業活動支出計		985,809,710	

事業活動支出構成比率



ランチョンミーティング 開催状況

	月 日	テ ー マ
第1回	4月21日	国際保健・看護IIでの海外研修の活動 (講師) 本学学部4年生
第2回	5月12日	1%の楽しみと99%の苦しみ、それでもなぜ 続けるのだろうか ーカンボジアでの開発支援活動ー (講師) 一般社団法人Kumae 代表理事 山勢拓弥氏
第3回	5月26日	peace in Cambodia ー孤児院での学生ボランティア活動ー (講師) peaceサークル 学生
第4回	6月 8日	語り合おう! 大学と国際について (講師) 国際看護実践研究センター アドバイザー 東浦洋氏
第5回	6月20日	インドネシア国立アイルランガ大学 短期交換留学報告 (講師) 本学学部3年生
第6回	7月14日	ベトナム国ナムティン看護大学集中講義 帰国報告会 (講師) 国際看護実践研究センター センター長 守山正樹教授



4月17日 読売新聞(朝刊)
熊本地震における学生の募金活動

5月29日 西日本新聞(朝刊)
団地再生 医療の視点で 宗像市日の里地区
看護学生が聞き取り調査

6月9日 読売新聞(朝刊)
医療・福祉で団地活性化 日赤看護大学生
住民と意見交換



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空がー続きになっ
て一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名
付けられました。

「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、
学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とがー続きにつながって欲
しいとの願いが込められています。

題字: 卒業生 吉田 歩さん/福岡県・柏陵高校出身

お知らせ

**大学祭「遥碧祭」と宗像市とアスティ内の企業との合同企画「アスティ祭」を
11月6日(日)に開催します。**

「遥碧祭」は、学生自らが企画運営するお祭りです。野外テントでの出店のほか、血圧測定や骨密度測定等を体験する看護
師体験など、看護を理解する企画が充実しており、日頃大学で学んでいることを広く地域の方に知っていただく貴重な機
会となっています。特に今年は、災害時要援護者への対応についてのシンポジウムも予定しています。

さらに、特設ステージでは、サークル「ゆいまーるのわ」によるエイサー(沖縄の伝統芸能)の披露や、バンド演奏とともに、
子どもから大人まで楽しめるクイズやゲームなどを準備しています。「アスティ祭」では、毎年ご好評いただいている、骨密
度・血圧・基礎代謝等の測定や、大学教員による計測結果説明と健康相談を行う予定です。

ご家族揃ってぜひお越しください!

**平成28年度大学教育再生加速プログラム(AP)「高大接続改革推進事業」に
本学が選定されました。**

「大学教育再生加速プログラム」は、文部科学省が国として進めるべき大学教育改革を一層推進するため、教育再生実行
会議等で示された新たな方向性に合致した先進的な取組を実施する大学を支援することを目的としたものです。

テーマI「アクティブ・ラーニング」、テーマII「学修成果の可視化」、テーマIII「入試改革・高大接続」、テーマIV「長期学外
学修プログラム(ギャップイヤー)」、テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」のうち、本年度はテーマVについて募
集がありました。全国から116件の申請があり、本学の提案事業が選定されました(116件中19件選定)。

保護者対象大学説明会にご参加いただきありがとうございました。

7月9日に開催した学部生の保護者を対象にした説明会には、たくさんのご参加をいただきありがとうございました。本学
の直近の取り組みや成果、学生の学修・生活状況等についてご案内させていただきました。いただいた貴重なご意見は、今
後の大学運営の参考とさせていただきます。

(公財) 大学基準協会の大学評価を受審し大学適合の認定を受けました。

本学は、2015(平成27)年度に、公益財団法人大学基準協会の大学評価(第2期認証評価)を受け、審査の結果、同協
会の定める大学基準に「適合」しているとの認定を受けました。認定期間は、2016(平成28)年4月から、2023(平成35)
年3月までとなります。



日本赤十字九州国際看護大学

Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行: 日本赤十字九州国際看護大学 広報委員会

〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地
Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

<https://www.jrckicn.ac.jp/>

寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集して
います。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受
けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認を
お願いいたします。